

平成 28 年度 第 4 回(仮称)苫小牧市民ホール建設検討委員会 議事要旨

1 日 時 平成 28 年 11 月 2 日(水)14 時 00 分

2 場 所 本庁舎 2 階 21 会議室

3 出席者

- (1) 検討委員会委員 6 名
- (2) オブザーバー(北海道大学大学院工学研究院)3 名
- (3) 事務局 市民ホール建設準備室長ほか 3 名
- (4) 傍聴者 6 名

4 次 第

(1) 開会

(事務局)

10 月 23 日(日)に市民フォーラムを開催し、およそ 170 名の方々に参加いただいた。内容としては目から鱗の話も多くあり、新しいものにチャレンジしていくために既存の固定観念や常識をどのように打破していくのか、ホールに馴染みのない市民を連れてくるということが公共施設の在り方であるということなどを講演いただいた。また、その際にアンケートを取っており、回答については集計中なので、まとまった段階で委員の皆様にもお示ししていきたい。

(委員長)

事務局から冒頭で市民フォーラムの概要を紹介いただいた。およそ 170 名の方々に来ていただいたということで、少しずつ皆様の関心が高まっているものだと認識している。衛館長の講演内容は、検討委員会の皆様にとっては基本構想の際にも可児市文化創造センターの事例として何度か出てきていたので、馴染み深いものであったと思う。可児市の取組や衛館長の主張されることは、劇場やホールを小学校や市立病院と同じように公共施設としてしっかり認識しないといけないということである。言われてみると当たり前のことなのだが、税金が使われる施設は広く市民全員に対して平等に手の届きやすいサービスであるというのが公共サービスの原則である。ややそれが薄らいでしまった時代があるという反省のもとで、公共サービスというのは市民を区別するようなサービスをしてはならない。例えば、経済的に不自由な家庭があったとしても、そういった方々が芸術文化に十分に触れる機会を平等にしていくものである。公共サービスはむしろそれが大切であり、例えば公営住宅を思い出してみると、一定の住環境を市民の方々が確保できるように公営住宅は整備されている。それと同じようなかたちで、公共の劇場やホールは文化芸術

という公共サービスを提供するための施設である。市民フォーラムでは、そのために取り組んでいるいくつかの事業を御紹介いただいた訳だが、検討委員会及びワーキンググループで議論していただいていることは、そうした価値観のもとで苦小牧として何ができるのかというアイデア出しをしていただいている。基本構想に基づいてのワーキンググループ会議での議論なので、前回の市民フォーラムの議論やその他にも社会的意義、衛館長がよく使われる言葉でいうと社会包摂の考え方を重視している。分け隔てなく市民の方々があらゆる機会を平等に得ることができるという概念を意識した基本構想に基づいて、同じような価値観を持った意見を多く出していただいている。

市民フォーラムは非常に参加者にとって有意義なものであった訳だが、先ほど、市から資料をいただいて、10月27日付けの苦小牧民報に市民からの投稿を掲載しているコーナーがあり、市民フォーラムについてのコメントが掲載されていた。その投稿のタイトルが「新時代です」ということでなかなかインパクトのあるものであると思う。「市民ホールをテーマにフォーラムが開かれました。税金で建設し、運営するのだから、演奏会や劇の公演、講演会に利用されるだけでなく、とにかくたくさんの幅広い市民に利用される施設にしないと駄目とのことでした。確かに私も、コンサートなどでしか市民会館に行かないのですが、税金が使われる公共施設なのだと思えば、遊ばせずに有効活用しないともったいないと思いました。たくさんの市民が積極的に関わっていく施設に一。施設活用も新時代に入っていくそうですね。」という投稿があった。

衛館長の話には難しい内容も含まれていたが、そういったかたちで新しい複合施設に対して、新しい価値観をもとに議論が進んでいるということをしかりと受け止めて考えておられるということで、この1つの意見だけでも市民フォーラムを開催した意義は非常に大きかったのではないかと思う。

少し長くなったが、この市民フォーラムについては先ほど事務局からも話があったようにアンケートを実施しており、それがまとめ次第、検討委員会でも紹介することになっている。また、市民フォーラムの講演及び議論の概要についても整理しているところである。次回以降の検討委員会でそれらを共有していきたい。

それでは、次第に沿って進めていきたい。

(2)検討委員会の進め方とスケジュールの確認

資料2「平成28年度 建設検討委員会及びワーキンググループ会議のスケジュール(案)」について説明

(3)WG会議での事業アイデア検討について

苦小牧版アイデア集について説明

(委員)

昨日、偶然「熱中小学校」という廃校を利用して町おこしのようなプロジェクトをやっている番組をテレビで観た。国からも支援金がいくらか出るような大きな番組で、北海道でも帯広市の近くのまちでそのプロジェクトが行われていたと思う。参加者の方にはその町の方もいれば、東京からも参加されている方もいて、その中で印象に残ったのが「どうして遠方からわざわざ参加されるのですか？」という話をしたときに、「魅力ある講師がいるから。」と答えた方が多くいらっしやった。様々な活動においてプロ・アマチュア問わず魅力ある人がいるということは、リピーターの創出につながると思って聞いていた。

キャッチフレーズは「もういちど7歳の目で世界を…」というかたちで、もう一度学校に行って理科の勉強などをしたりするような紹介の番組である。市民の方や外部の方もいらっしやる中で、魅力ある人間というのは人を呼ぶものだと印象に残った。

(北海道大学大学院工学研究院)

どちらのワーキンググループからも出ていた意見として、大人になってまた改めて学びたい、市民から市民へ技術をつないでいきたいというアイデアが出ていたが、非常に参考になる例だと思う。

(委員)

その取組は、どんどん広がっているようである。1番最初に始めた学校が「熱中時代」というドラマを初めに撮影した場所がタイトルの由来になっているようである。

(委員長)

ワーキンググループでは精力的に議論していただいていると思っている。本当にアイデアが豊かで、夢が広がるアイデア集がどんどん出来てきているように思う。夜の施設利用の話題で、24時間利用というのはなかなか課題があるのではないかという指摘があったと思うが、現時点ではそれでいいと思っている。「24時間体制での人員配置は難しいので無理だ。」という話ではなくて、どの程度、どう工夫するとそれが実現できるようになるのか今後考えていくことが重要である。現在、ワーキンググループ会議で議論していただいているのは、「こういう活動ができることが公共施設として意義があることである。」「本来こういったことをしたい。」ということを出していただいて、そういったものにどれだけ近づけていけるかが施設の運営であるとか、苫小牧市の努力ということになってくると思う。今後、議論することがあったときも「現実的にこのアイデアは難しい。」ではなく、「本来はこういったことができるといい。」ということアイデアとして出していただきたい。

自分が取ったメモを見ていると、こういったこともできるのではないかというアイデアが出てきて、そういうことを連想できるアイデア集というのは本当にレベルが高いと思う。例えば、「空き部屋活用不動産」は、文化芸術活動をしている方々をコーディネートして、空いている諸室を使うということが割と多いと思う。しかし、極端な話をすると空いているのなら空きっぱなしよりも誰かに利用してもらった方がいいのではないかと思う。衛館長がいる可児市文化創造センターのように、3日前に諸室が空いており、料金を半額にするので、残業や受験勉強をするために貸すということでもいいと思うし、仮眠したいから3時間貸すということでもいいかもしれない。空き部屋をそのままにしておくよりも使いたい人が使えるという仕組みをマネジメントしていくことで、市民にとって親しみのある環境になってくるのではないかと思う。

(委員)

現状では市民会館を24時間貸していないのだが、例えばイベントで業者が入ったときに「何時まで借りることができますか。」ということをよく聞かれることがある。本来は22時までのところを延長して貸すようなこともよくあるので、今後、条例でも夜遅くまで開館することが許されるものにしていけば、毎日とか毎月ではなく、状況に応じて対応できる。

また、現市民会館では大ホールの舞台練習に限ったことであるが、今でも3か月をきった場合について、暖房や舞台上の照明を使わないという条件で半額にして貸出す制度がある。しかし、一般的に周知されていないのが現状である。例えば、全市民が会員になれるような方法でスマートフォンに登録してあれば、空き室の情報を送付する仕組みがあると面白い。現状では、貸し館業務で受付にお客様が来られたときには、今でも複写式の受付簿で昔からずっとやり方が変わっていない。当然そういったものを変えていく中で、うまくオンラインを使いながら発信できる場をどのようにつくっていくかを考えていくと、ワーキンググループから出てきたアイデアは可能になってくるのではないかと思う。また、マネジメントの問題を整理していけば可能なことが多くあると感じている。

(北海道大学大学院工学研究院)

展示・窓口部会での「とまこむの編集方法」について説明

(委員)

とまこむの方々の話を聞いていて、先取りで常にアンテナを張って情報を収集しており、情報発信についても常に先のことを伝えている印象だった。そうしたことから、窓口機能は2、3か月前の情報を発信していかなければ遅いということ非常に感じた。公共施設ということもあり、世代を越えた幅広い方々に利用してもら

いたいで、窓口キーパーソンとなる人を置いて例えば若いお母さんやお年寄りの方など世代別に何人かが集まって、そういった情報を発信していかなければいけないと思う。色々と制限してしまうと狭まったものになってしまうので、窓口は幅広いものでなければいけないと思った。

(北海道大学大学院工学研究院)

最後に出ていた「世代を越えて」という御意見だが、とまこむはターゲット層を絞っていて、市内に住んでいる主婦の方々をターゲットにしている。アンテナを張っている編集者は主婦の方々で、自分たちも情報を知りたくて読者である友人たちに伝えたいという思いでやっている。だからこそ、様々な情報が出てくるということを仰っていた。ただ新しい施設を利用するのは主婦の方々だけではないので、そういう意味でも幅広い世代の方々に情報を届けるために幅広い世代の方々に情報発信を担う必要があると思っている。これに関して何か御質問などはないだろうか。

(委員長)

ターゲット層の話が出ていたが、2つの考え方があると思う。広い世代を狙うことと、敢えてターゲット層を絞ってやっていくことも可能性としてはあるのではないかと思う。例えばシニアマーケットやシルバーマーケットという言い方をすると、高齢化率が高まってきたので、定年退職後の方々を主たるターゲットとして発信していくということも芸術文化で考えていくのも手だと思う。この仕組みのように考えると、ライターや編集者の方々の平均年齢が70歳を超えていてもいいと思っていて、そういう意味でアイデアが広がっていく取組であると思った。

(北海道大学大学院工学研究院)

資料1「活動事業アイデアの全体マッピング(案)」について説明

(4)事業展開に関する事例勉強について
事例勉強集について説明

(委員)

いわき芸術文化交流館アリオスの事例で、移動映画館の事業を実施した際にアーティスト側には何らかのギャランティー(出演料、契約料の意)が発生しているのか。

(北海道大学大学院工学研究院)

施設の主催事業になってくるので、アーティストには出演料が発生している。

(委員)

やはり連携だと思う。例えば、先月に札幌でショートフィルムの国際短編映画祭をやっていた。世界 120 か国のフィルム 4,000 本くらいがあって、子どもでもとつきやすいカテゴリーを中心に作品をアーカイブしている。また、短い作品は 15 分のものもあれば、さらに短いものだと 30 秒程度で終わるようなものもあり、短い時間の中でも喜怒哀楽を表現する工夫を凝らし、子どもも飽きないようなつくりになっている。そのように、最近は映画館に行かなくても上映できる機械さえあれば、どこでも映画を観ることができるような時代になってきている。施設の中で気軽に映画を観ることができるような場所はますますできてくると思う。ちなみに、この市民ホールができるのは 5 年後くらいだろうか。

(委員長)

来年度に基本計画を策定し、その後に基本設計や実施設計、建設となると 5 年以上はかかるのではないかと思う。

(委員)

5 年以上先になると外の動きも大きく変わってくると思う。そうした動きに近いものはすでにスマートフォンのアプリであるわけで、Airbnb や Uber などは地方都市にも波及している。そういった事例を参考に例えば、苫小牧市民だけに空き室情報が 3 日前にくるといったような告知を送付することもできる。こういった情報をまとめるメディアディレクターが情報を集約していくことで、60、70 代の方々でも気軽に市民ホールを使えてしまうわけである。

(北海道大学大学院工学研究院)

現在、話し合っている内容をどう運用するかについて時代に合わせて変えていくことは可能だと思っている。

(委員)

紙という媒体はこれから無くなってしまふものであり、免許証よりもスマートフォンを持っている人が多いくらいである。そういった時代の中で、苫小牧市としての面白さとスペースを利用して、あらゆるサービスを継続してイベントができあがるようになっていけば良いと思う。例えば、市民が住民票を持っていれば、市民ホールであらゆるサービスを受けられるようなかたちができあがってくると面白い。

(北海道大学大学院工学研究院)

事業それぞれに対して、どのようなコンセプトでやるというテーマ設定を決めていけば、それに伴うアイデアや技術はついてくると思う。

(委員)

苫小牧市らしいものということで、「紙」に焦点を当てるならば、ペーパークラフトに絞り込んで人々を集めれば本当に多種多様な人が集まってくると思う。球体を作ってみたり、折り紙で何かを作ってみたりなど、そういった絞り込んだテーマでまだまだできることがあるのではないかと思う。例えば、ペーパークラフトを使った学術的な研究発表やダンボールを使った建築物やおもちゃの創作発表など、後はどのように情報発信するかだと思う。その他にも、ビジネスにできるような国際ペーパークラフトフェスティバルのようなものを開催することで、面白い人がここに集まってビジネスにできるようなスタートアップができれば色々なものになると思う。

(北海道大学大学院工学研究院)

目玉となるような苫小牧らしいものを発信できれば、人々が集うというところにつながるといえることであると思う。

(委員長)

「集う」ということで事例紹介していただいた中で重要なことは、アーティストを呼んで行っている事業をホールやスタジオでやっていないということである。アーティストには出演料は払っていると思うが、オープンスペースでの開催なので、アーティスト側から施設使用料はもらっていないのではないかと思う。ここが非常に重要で、オープンスペースをただ用意しているだけでは、毎日同じようなことの繰り返しになってしまうので、オープンスペースの利用に対してスパイスをかけていくような仕組みが必要になってくる。中学生がたむろして宿題をしているというのは日常としてあっていいと思うが、アーティストがオープンスペースをどう使いこなして日常とは違う状況を生み出していくかが重要であると感じた。

また、情報環境の話題があったが、先ほどのまちライブラリーは建築分野では非常に話題になっていて、情報としてLINEやFacebookなどデジタルでつながることが増えている一方で、急速に増えているのはFace to Faceのコミュニケーションである。まちライブラリーがまさにそうで例えばAmazonなどデジタルネットコミュニティの中でコメントや感想を言ったりというようなつながりがあるが、直接的に人と人が面と向かって場所を共有してコミュニケーションを取ることが重要になってきている。Face to Faceの環境はこれまでの反動なのかもしれないが、そこが物理的な施設がある意味であると思う。まちライブラリーに関して、コミュニケーションと情報のようなものの関心が高まっているということで、この話題を絡めておきたいと思う。

(委員)

これから新しい施設をつくるにあたっては、文化芸術の拠点になるというのが1番であると思う。現在、一般市民の方々が持っている意識としては、現市民会館でやりたいことはあるが、それに対応できないという先見を持っておられる方が多くいる。市民ホールに来たら何をやっていて、何ができるのかわかるようにしていかなければいけない。それはホールに限らずオープンスペースでも同様で、どういったことができるのか知りたい方が来た時に対応できるような必要性はこれから出てくる。

「育てる」ということでアーティストを育てるということももちろんそうだが、市民ホールでしっかり働ける人を育てることが一番の課題である。当然、衛館長のような方をトップに置いて、人を配置するにしても、様々なジャンルの人間を全国各地から引っ張ってくるというわけにはいかない。1番いいのは市内の中でそういった人を育てて運営できるようなかたちをつくることである。指定管理制度になってからは一般競争入札で業者が数年おきに代わっていくことで、以前にできていたことができなくなってしまうなど運営が疎かになってきたという失敗例が多く見受けられる。そうした中で、最近は新しいホールができるとNPOなどの組織をつくっていくかたちが多く、市民ができるだけ施設に関われるようにしていく傾向にあり、そういった環境の中で新しい市民ホールでも人を育てていけばいいと思う。私は舞台業務に携わっているが、照明や音響など苫小牧市内の中学生や高校生でもそういったものに興味を持っている子どもは多くいると思う。そういった人を育てていけるような環境をつくっていきながら、企画や運営していくことが1番ではないかと思う。

また、ワーキンググループで出てきたアイデアは全て良いアイデアだと思う。これは施設ができた時にうまく対応できるように落とし込んでいけばいいだけなので、後は人をどのように集めていって、育てられるかにかかっている。

(北海道大学大学院工学研究院)

「育てる」事業は、アーティストを育てていくことを重視してお話したが、茅野市民館の例も含めてスタッフを育てることについても力を入れている。

(委員長)

金沢市民芸術村のアクションプランについて、最初アートディレクターになった人は一本釣りや公募などの方法で施設に携わっていると思うが、年数が経過した時にそこで学んだ人がアートディレクターになっている仕組みは非常に大事だと思っている。そうした師弟関係を積み上げていくことによって、苫小牧としての価値観を持ったディレクターが引き継がれていく。ただ単に教育するということや知識を高める、技術を教えるということではなくて、どういう関係づくりの中で育てていくのかがこの例のポイントになっている。

(5)事業連携の可能性について

(委員長)

資料1「活動事業アイデアの全体マッピング(案)」について説明

(委員)

豊橋市文化振興指針の「はぐくむ」、「ささえる」というところで行くと、「青少年の芸術文化機会の拡充」、「市民文化活動の担い手育成」というのは、これまでも何度か出てきているコンシェルジュのような育成も重要である。コンシェルジュは市民ホールに1人いればいいというわけではなくて、どの世代にも対応できてあらゆることに対応できるようなスタッフに全員がなれることが究極の目標だと思う。まず文化を支えるスタッフはしっかり育てていく必要がある。

(北海道大学大学院工学研究院)

コンシェルジュの話はこの全体マッピングでいうと鑑賞部会でアイデアとして出てきており、施設コンシェルジュは「つなぐ」に分類している。確かに「つなぐ」でもあると思うのだが、御指摘のとおり展示・窓口部会でもコンシェルジュという話が出ていた。

(委員)

市民は施設のどこに行くかというところでは窓口だと思うので、そこで全て対応できるようにする必要があると思う。窓口のスタッフが貸し館のことしかできないというわけにはいかないで、この部分をこれからしっかり詰める必要がある。

(北海道大学大学院工学研究院)

現在は「つなぐ」で分類しているが、御指摘のとおり全体マッピングの「育てる」にも分類されると思う。

(委員)

専門的な知識を持った方で、なおかつ人と人をつなぐことができるような方が必要である。例えば、演劇や音楽、そういった部分で精通している人の育成は欠かせない。

(北海道大学大学院工学研究院)

専門の方という話は金沢市民芸術村の事例が参考になる話だと思うが、発掘するだけでなく「育てる」ことは重要なことであると思う。

(委員)

活動部会で議論している印象としては誰かに教えたい、教わりたいという両方の意見が多かった。まずは、どこで何を教えてもらえるかといった情報を知る場所がないので、それがわかる場所がいい。施設を使う人がお金を払わないと情報を得られないということではなくて、お金をかけずとも自分が知りたい情報を得られる環境があればいいと思う。

(北海道大学大学院工学研究院)

情報を得る場所が大切であるということであったが、それぞれ鑑賞部会や活動部会で話していることの中に非常に大切なエッセンスが含まれていると思う。「つなぐ」や「関わる」に分類していることが、「知る」に関わっているケースもある。アイデアを分類しながら思ったのは、1つのアイデアが全てのことに関わってくることである。具体的な事業のアイデアはこの先も出していけばいいと思うが、それぞれで強調していきたいポイントを押さえていくと自ずと横断的なアイデアが出てくるのではないかと思った。

(委員)

現市民会館の窓口業務やホームページでの情報は、実際に市民の方が知りたい情報とのギャップが大きい。貸し館をするためのデータも紙の台帳でやっているのが、現状である。市民会館に来訪するとアイビープラザやコミュニティセンターでどのようなことをやっているかわからなかったりすることがある。それらの施設は、管理運営をしている指定管理者が異なっているので、苫小牧市全体のネットワークとしてどこで何がやっているかを把握できる体制になっていない。本来は苫小牧市の文化に関わる施設は、情報が全て一元化されて見るようにしていかなければいけない。

(北海道大学大学院工学研究院)

「知る」という事業を見ていただくと、「知る」ということに対するきっかけづくりという部分を強調したアイデアを分類している。まずは触れていただくというきっかけづくりを **Face to Face** でつくっていくというのは、「知る」の事業の1つのポイントであると思う。また、御指摘のとおり、市内全体の情報であったり、統合や発信するシステムを作っていく必要があるというのも重要なポイントである。「関わる」や「つなぐ」は似たような概念になるが、イメージとして「関わる」は、市民が運営に携わるということイメージしながら分類していた。したがって、アイデアとしても「腕利きサポート部隊」を分類している。また、「つなぐ」はきっかけづくりをイメージしているが、もしかすると違う方針を持つこともできるかもしれない。

(委員)

様々なアイデアが出てきたが、出てきたアイデアをやることは決定ではない。「関わる」に関して、ロビーを含めた人が集えるような場所でどのような規模やかたちでつくっていくか、共有空間をどのような規模でどのようなものをつくるかが非常に重要になってくる。

(北海道大学大学院工学研究院)

具体的な設定は次の段階になると思うが、みんなが集える場所づくりという発想は大切である。

(委員長)

全体マッピング(案)とその他の資料についてコメントさせていただくと、展示・窓口は全体マッピング(案)を見ると間が抜けているという感じがするが、1つの部会のアイデアを2つに分けているので他の部会と密度はあまり変わらない。今後もう少し議論できればいいと思っているのは、このマッピングをしたことでKJ法のようなアイデア出しに似た手法として、空いているスペースに本当にもうアイデアがないかという議論ができると思う。今までの議論を見返してもう一度議論していただくタイミングがあった方がいいと思うので、各ワーキンググループでその視点をもう一度持ってマッピングを見ながら、例えば「展示で『つなぐ』について何かアイデアがないか。」というような話を今後の展開としてやっていくことは良い方向だと思うので、議論の参考にしていただければいいと思う。本日は検討委員会委員の皆様の方が勉強させていただいた回だと思っている。おそらくワーキンググループの委員の方が勉強されていて、私も含めた検討委員が後を追っているようなかたちになっているのではないかと思う。本日、精力的に議論を行っていただいたことを参考に、御意見は事務局で取りまとめていくということで引続き検討していきたい。

本日は3つのことを議論した。1つ目はワーキンググループによる事業アイデア検討の報告をしていただいた。

2つ目はスライドを使って全体マッピング(案)で「育てる」、「集う」、「知る」、「関わる」、「つなぐ」のそれぞれの分類を見てきた。これはまだ確定ではないが、主に国内において精力的に取り組んでいる事例を学んだ。

最後はなかなか議論をすることが難しいところではあるが、こうしたマッピングをすることによって各種の事業連携を意識した検討をこれからもう一度精査しながら積み上げていく必要がある。それらを検討委員会として確認したことが本日の議論の内容であったということでまとめさせていただきたいと思う。

(6)その他